
ニィヤの えりざべす・からあ

茅野 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニイヤの えりざべす・からあ

【Nコード】

N4344E

【作者名】

茅野 遼

【あらすじ】

高杉家の愛猫・ニイヤのお話、第二弾？です。左大腿部に傷を負ったニイヤが、エリザベスカラーとちよっただけ格闘（？）する話。

（前書き）

ちよつとした時間潰しに、お気楽にどうぞ。

高杉家の愛猫『ニイヤ』は、シャムネコと日本猫の雑種で、雌猫だ。この冬一月を超えて、漸く一歳八ヶ月になった。

ニイヤの全身は、茶色がかったクリーム色で、四肢の肘・膝関節から下と、顔の中心と耳、長い尻尾は濃い茶色。左右の眉は一本ずつ、先っぽがカールしている。びっくり顔で、瞳の色はブルー……。

性格は、甘えん坊の気分屋。少々、人間臭い所がある。身体能力の特徴として、瞬発力と跳躍力は素晴らしいが、反射神経がやや鈍い。

さて、このニイヤには、ある特技があった。

高杉家の面々が、食卓に着く瞬間。例えどんな所で何をしてい様とも、必ず家族の揃った食卓の脇に、姿を現す。

食欲に関してのアンテナの冴えは、かなりの物らしい。

今日も呼んでもいないのに、ニイヤの首輪についた鈴の音をチリチリと響かせながら、玄関から飛び込んで来た。

玄関と、居間 兼 客間となっている六畳間を仕切る古いガラス戸を、ニイヤが爪で、カリカリと音をさせながら引っかいている。

「あ、ニイヤだ。おいで！」

高杉家の長女、菖蒲が、炬燵に足を突っ込んだまま、上半身を捻って腕を伸ばして、戸を開ける。

『ミニヤアーア』とでも表現するのが丁度良い様な甘えた鳴声を

あげて、ニイヤが六畳間へと侵入する。

（今日は、何のご飯、食べているの？） と、言いたそうだ。 小首を傾げている。

「ニイヤ、本当にご飯の時間だけは、正確に判っているみたいだね」

菖蒲は少し呆れたように、両眉を上げている。

「食い意地は、お父さん譲りかしらねえ？」

と、母、政枝も半分呆れ、半分は感心顔だ。

ニイヤは、『ニヤア』と、もう一声、甘えた声を上げた。

「ハイハイ、鰹節、持ってくるから」

政枝が立ち上がり、台所へ向かった。

「お、ニイヤも来たか。 そーか、そーか」

トイレから出て来た じいじ が、ニイヤを持ち上げ、自分の胡坐を掻いた足の上に、押さえ込みつつ、一番テレビが見やすい、定位置へと座った。

（ちよつと、ご飯、貰いに来たんだけど？） と、ニイヤは一気に不機嫌顔になってしまう。

じいじは、お構いなした。

ニイヤは身体を仰け反らせる様にして、前足を頭の上へとクロスさせながら、思い切り伸ばす。

（ちよつと、アヤメ、助けてよ？） と、訴えているようだ。

「お父さん、ニイヤは鰹節、食べに来たんだから。 嫌がつてるでしょうに」

政枝が台所から、ニイヤ用の餌皿と鰹節の袋を持って戻って来た。 菖蒲がニイヤのヘルプに応えて、じいじの膝からニイヤを持ち上げる。

「はい、ニイヤの好物」

そう言つて、政枝から鰹節の載つた餌皿を受け取つて、新聞紙を広げた上に置く。

「それは、今日の新聞か？」

「そうだよ。 どうせ、もうテレビ欄しか見ないでしょ？」

じいじに言つて、菖蒲はニイヤの食いつぷりを眺める。

ニイヤは食欲旺盛なのに、食べるのが大層、下手だ。 何時も皿から鰹節を、盛大に撒き散らしてしまう。 それで、新聞紙が必要なのだ。

家族三人揃つて食事が始まる。 菖蒲は自分の食事に手を付けながら、ニイヤの様子を眺める。

……と、こんな光景が、高杉家のいつもの食事風景だ。

2

ある時、菖蒲がニイヤの左大腿部に、異変を発見した。

初めて異変を発見した時から、少々時間が経っていた。 その時は、大した事は無いだろうと思っていたので以来、数ヶ月間放置してしまっていた。

「お母さん！ ニイヤの後ろ足、毛が抜けちゃう！」

菖蒲の言葉に、政枝が洗濯機から洗い終わった衣類を籠に移しながら、声だけを返した。

「生え変わりの季節かしらねえ？」

「違う！ 一箇所だけ、なんか硬くなつた皮膚がくつついてて、一

緒に毛が抜けるの！」

菖蒲の良く判らない説明に、政枝も作業を止めて、居間へと顔を出す。

「どれ？」

そう言いながら、菖蒲に抱っこされたニイヤの左大腿部に手を伸ばす。

『フニャー……』と鳴いて、ニイヤが猫パンチを放とうとして、バタバタと動く。

「ちよつと、大人しくして！ あら、本当！ ちよつと心配ね。

菖蒲、今から車出してくれるんなら、病院に連れて行こうか？」

「いいよ。お母さん、キャリーバッグ」

菖蒲に言われて、政枝がキャリーバッグを用意する。

ジタバタとしているニイヤを、二人掛かりで無理矢理キャリーバッグへ押し込んだ。

ニイヤが連れて行かれた動物病院には、白い服を来た人間がいる。ニイヤの天敵だ。その天敵はニイヤの左大腿部の毛を、小さなマツチ箱くらいの範囲分だけ、綺麗に剃り上げてしまった。

「^{かさぶた}瘡蓋になつていますが、随分前に作った傷みたいですね。原因

は、この状態では判断が付きませんが……。少し炎症を起こしかけているようですから、傷跡を綺麗にしましょう」

そう言つて、固まっていた皮膚を剥がして、消毒をした。

『ウウウウウウ……ニヤギヤ！ フウー……』ニイヤが唸っている。

菖蒲に押さえられ、自由になる場所は少ないながら、ジタバタと

身体を動かしている。

「いやあ、痛そう……頑張れ、ニイヤ。 イイ子、イイ子」

「本当に、何時どこで、こさえて来たのかしらねえ……」

と、政枝は首を捻る。

（あやめ！ 放してよお！ ちょっと、その白いヤツ、なあにすんのお?!） と、ニイヤは猫語で言っているのかも知れない。

『フニヤ！ ニヤウウウウ……』 としか、人間の耳には聞こえない。

「がんばれ、後ちよつと！ 大人しくして！」

と、声を掛けながら頑張る菖蒲に、政枝も加勢をする。 獣医は

ニイヤの首筋から、注射針を引き抜いた。

薬を用意し、政枝と菖蒲に説明をしながら処置を続ける。

「処置の方法を、見ていてくださいね。 一日二回、朝・晩に、こうやって傷口を洗い、膏薬を塗って、この白い粉を掛けて下さい。

ゴメンね、痛いね……」

最後の言葉は、ニイヤを宥める猫撫で声だ。 その言葉通り、ニイヤはその粉を掛ける処置の時、本日中で一番の唸り声をあげる。

（いっつったあーい！ やめてええええ！） と、叫んでいるようだ。

『フウウウウ、ニヤアアアアアア！』 と、三人の耳には聞こえている。

菖蒲と政枝の眉が、思い切り可笑しな角度に縮まり、眉間が狭まって額に皺が寄る。

「痛そう……」 つい、菖蒲が小さな声を出す。

「この粉が、一番沁みるかな？ 傷口を乾かす作用があるんです。

「可哀想だけど」

獣医も気の毒そうに、軽く眉を潜めている。

「傷口を舐めないように、エリザベスカラーをして置いてくださいね」

言いながら素早く、ニイヤの首にエリザベスカラーを巻きつけた。

『……ウウウウ』 今度は痛みではなく、急に狭まった視界と首から上の違和感に、ニイヤがエリザベスカラーを治療台の上に擦り付けるような仕草をしながら、後退りをする。

ヨチ、ヨチ、ヨチ、ヨチ……。 そんな効果音が最も適している様な、見事な後退り！

「……可哀想だけど……、プ！」

菖蒲は、つい吹き出してしまった。

「可愛い……」

クスクスと、……いや、クククク、と、声を潜めて笑ってしまう。

政枝も釣られて、ちよつとだけ吹き出してしまった。

高杉家へ帰宅して、ニイヤの出で立ちを見たじいじは、目を丸くした。

「頭に、囲いをつけられたのか」

そう言っ、背中を向けて縮こまっている、頭の部分のシルエットが逆三角形になってしまったニイヤを、観察していた。

今日のニイヤは、元気が無い……いや、元気はある。何とか首筋にくっ付いた、妙な形の邪魔な物体を外してしまおうと、家中あちらこちらの突起部分に、その妙な物体を擦りつけながらヨチヨチと歩き回っている。

（いやああ！ 周りが良く見えないいい！ いらない、いらない、こんなのいらない！）

『ウウウウウウウウ……』 ズズズズ、カタカタカタ、タタタタタタタタ……！

ニイヤの唸り声と、エリザベスカラーがあちらこちらへ擦り付けられる微妙な物音の、協奏曲が聞こえて来る……。

「ニイヤ、暫らく外へは出して上げられないから、お父さんも気をつけてね？」

菖蒲がニイヤの様子を見ながら、じいじに言っている。

「外、出したら駄目なのか？」

「車道に出ちゃったら、視界が狭い分、車が来るのも分からないでしょう？」

「事故、起こさないように、可哀想だけど外には出せないよ」

政枝と菖蒲に言われて、じいじも「ふうーん」と言っ、頷いていた。

夕食時間となり、ニイヤはやっぱり高杉家の食卓周りに現れる。

「ごはん、どうやって食べるんだろ？」 菖蒲がふと、疑問を口にする。

「上げてみれば、分かる」 じいじが言って、自ら台所へ行き、鰹節と餌皿を持って来た。 じいじだって興味津々だ。

「ほれ、ニイヤの好きな鰹節だぞお」

言いながら、エリザベスカラーに囲われた、ニイヤの頭の前に、鰹節の載った餌皿を押しやってみた。

（あ！ 美味しいのが、目の前に！） ピクリ、と反応するニイヤ。直ぐにエリザベスカラーの中で首を伸ばして、舌を伸ばす。

ハグ、ハグ……（……う、届かない……） きつと、この邪魔なモノの所為だ。

畳に邪魔なモノの縁を押し当てる。 邪魔なモノの首側の縁が、ニイヤの首を押さえつけて、ゲエ、となる。

「やっぱり、ご飯食べてる時ぐらいは外して上げようか？」 菖蒲が言って、ニイヤの首から、カラーを取り外してやった。

（ごはん、食べられるううううう！） と、思ったかもしれない。ニイヤが鰹節を食う様に、舌を忙しく動かし始める。 勢いが付き過ぎて、餌皿がドンドン前へとずれて行く。

（ちよっとお！ 待ってよお！） と、益々、力強く舌を動かす。また、餌皿が逃げて行く……。

「ニイヤ、タダでさえご飯食べるの下手なのに……」 と、菖蒲が気の毒そうに呟いた。

「食えないなあ、中々。 焦り過ぎてんだな」 と、じいじは半分、笑っている。

歩くのにも邪魔、首は重い、ご飯もゆっくり食べられない。その上、普段は余りしないけれど、猫としての身嗜み・毛繕いをする事も出来ない。

ニイヤの中で、ストレスと言う名の怪物が、ムズムズと動き出してきた。

翌日からニイヤは、便秘になってしまった。
「猫も便秘になるんだね……」 と、政枝はちょっとだけ感心していた。

菖蒲は、余りにニイヤが可哀想なので、エリザベスカラーを外す時間を、少しだけ作ってやることにした。

「外している間は、傷口舐めないように気をつけて上げないとね」
そう言つて、傷口に手で軽く蓋をして、猫の安心するツボがある眉間の辺りを、指で撫でてあげた。

ニイヤは子猫の頃から、そうしてやるとグッスリと眠ってしまう癖がある。

（……ふう。 いい気持ち……） 『フニャア……』 スー、スー、スー……と、寝息が聞こえます。

本の少しの間だけ、ニイヤに平和が訪れた。

可哀想ではあるが、仕方が無い。 目が覚めれば、またニイヤの首にはエリザベスカラーが取り付けられてしまうのだった。

更に数日が過ぎ、漸くニイヤの傷口も回復をして来た。 ここまでには、ニイヤを動物病院へ何度か連れて行っている。
エリザベスカラーにも、少しだけ慣れて来た様だ。

けれど、邪魔な事は変わらない。 あれから、ニイヤは一つの技

を身に着けてしまった。家中のあちらこちらへとカラーを擦り付けて、上手くすると、弱くなって来てしまったカラーの結合部分のマジックテープが、ペリペリと音を立てて剥がれてしまう。

高杉家の面々は、それを見つづける度に、慌ててニイヤを追いかける。

「猫の舌はザラザラとしていますが、あのザラザラで餌の肉を削って食べるんです。なので傷口が痒くて舐めてしまうと、折角、治りかけた処をまた、削ってしまうので」

と、ニイヤの天敵、掛かり付けの獣医さんに言われていたので、慌てるのだ。

今日は、じいじの畑から更に、近所の庭へと出て行ってしまったようだ。

「全く、どこに行ったのかしら？」

政枝は朝からニイヤを探して、家事の合間も休憩が出来ないでいる。「もう傷口も大分、塞がってきていたから、平気じゃないか？」

じいじも協力してニイヤを探していたのだが、昼食時間に言い出した。ニイヤを探すのが、面倒くさくなってしまったのだ。

「それはそうだけど……」

政枝が小さな溜息をついた時、ニイヤの首輪の鈴音が聞こえてきた。「飯の時間には、必ず帰ってくるなあ、ニイヤは」

鈴音を耳に入れたじいじが、少し感心したように言った。

じいじが感心した一言を言い終えた時、ニイヤが何事もなかったような顔をして、高杉家の食卓周りへ姿を現した。

（「ご飯、ご飯！」）等と思っているのかも知れない。『ミニヤアーア』と、甘えた泣き声を上げる。

「お前は、散々、探させておいて、呑気な猫だわねえ。ハイハイ、鯉節、持って来てあげるから」

政枝はホッとした顔で言って、台所へと立つ。

「もう、傷も平気そうだな、エリザベスカラー、取っておいでも良いんじゃないか」

じいじはそう言って、のんびりと昼飯を取り始めた。政枝が台所から戻って来て、ニヤの顔の前へ鯉節の載った皿を置いた。

「そうだねえ、もう、外しておこうか？」

言いながら、テレビの横に置いてあったカラーを眺めやる。

数分後、食事を終えてエリザベスカラーを手に持った政枝の姿を目に入れたニヤは、早速奥の部屋へと逃げ出した。

「もう、つけないから良いのに……」

分別のゴミ袋へカラーを入れてしまいながら、政枝が少し呆れた顔をしていた。

家族が誰も、カラーを片手に追いかけてこない。ニヤはベッドの下で、埃塗れになりながら、目を丸くしている。

（あのヘンなの、もうつけなくても良いのかな……？）と、思っているのだろうか？

暫らくしてから、おずおずとベッドの下から這い出してきた。

長女・菖蒲が帰宅して、ゴミ袋の中に捨てられた、ニヤのエリザベスカラーを発見した。

「お母さん、もう、カラー着けなくて良いの？」

娘に聞かれて、政枝が答える。

「もう大丈夫そうだから、外してしまう事にしたよ。ニヤがソレを外していなくなる度に、探しているのも大変だから」

「ふーん。ま、その方が、イイかもね」

答えながら菖蒲は、初めてニイヤがエリザベスカラーを取り付けられた時の事を思い出した。

「でも、あの後退りは、面白かったな……」 そう呟いて、ゴミ袋からそつとカラーを拾い上げた。

『その内、またつけて遊んでみようつと！』 そう、思っている。

久し振りに厄介な物から開放され、呑気にベッドの上で丸くなって熟睡していたニイヤは、何かを感じて目を覚ました。

（何か、やな予感がする……） と、感じたのかも知れない。

キョロキョロと周りを見回して、自分の周りに怪しげな気配の無い事を確認してから、ニイヤは再び安堵を取り戻して、夢の中へと旅に出る。

菖蒲の含み笑いは、夢の中のニイヤには届かなかった。

（ お わ り ）

（後書き）

ありがとうございました。これからも、最低一月に一話くらいは、短編を上げられるように頑張ってみようかと思えますので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4344e/>

ニィヤの えりざべす・からあ

2010年10月11日19時27分発行